私立大学横山助教授　　連載７

　横山は、ますます勉強が好きになっていった。学ぶということが、こんなに楽しいと思うのは人生ではじめてのことである。これも、すべて山田のおかげだ。
　もともと人間には知に対する欲求がある。それまで、知らなかったことを知るということは何事にも変えがたい喜びなのだ。横山は、ある事情で、みずから勉強するということを避けてきた。その封印が、山田によってとかれたのである。
　横山は山田に聞くだけでなく、自分でも図書館によく出かけるようになった。インターネットも多いに活用して、自分の知らない知識を蓄えた。
　そして、この知るという喜びを学生に伝えたくて、講義でも、勉強することがいかに楽しいかということを学生に訴えた。
　そんなある日、思わぬ事件が生じた。朝大学に来ると、正門前にテレビ局の取材陣が多数集まっている。横山はいったい何が起きたんだろうと、いぶかっていると、マイクを持った記者から質問を受けた。
「あの、こちらの大学の関係者ですか？」
「はいそうですが」
「今回の理事長の不祥事をどう思われますか？」
「理事長の不祥事？私は何も聞いていません」
そういうと、興味を失ったように記者は横山のもとから離れた。理事長の不祥事とはいったいなんだろうか。横山はいぶかった。
　自分の部屋に着くと、山田があわてたように入ってきた。
「横山先生、大変なことになりました。うちの理事長が国の補助金で不正を働いたということがマスコミに流れています」
「補助金？それはいったいなんですか」
「先生はそんなことも知らないんですか。国が私立大学に出している一種の援助金ですよ。本学でも年間二十億円近い金を貰っているはずです」
「二十億円？そんな大金ですか」
横山は金に困っていないので、金に対する執着はないが、二十億円とは大きいなと感じた。しかし、山田の話によるとマンモス大学では、その補助金の額は百億円にも達するという。日本の巨大私立大学には何かと黒い噂が絶えないが、その背景には、補助金も大きく関係しているようだ。
「でも、うちの理事長は、本業の方でかなり稼いでいるはずでしょう。そんなに金に困っているようにも思えないけどな」

そう言うと山田は
「私もそう思っているんですが、どうやら、今回のマスコミ報道の裏には反理事長派の暗躍が絡んでいるようなんです」
横山は、驚いた。うちの大学に反理事長派などがいるのだろうか。
「政治に疎いことが横山先生の取り柄のひとつとは思いますが、少しは、自分の大学の内情に気を配って下さい」
　山田の話によるとこうだ。
　田村理事長は、不動産と交通の社長を務めていて多忙である。いわば大学の理事長は名誉職のようなものだ。だから、多くの理事たちは、近いうちに田村は大学の理事長を辞するものと思っていた。
　そして、後継者のひとりと目されているのが、田村理事長の娘婿で、黎明学園大学学長の吉野耕作である。吉野は商学部の助教授時代に、田村に見初められて、田村の娘と結婚した。いずれは、自分が大学の実権を握ると思っていた。
　それが、予想に反して、田村はなかなか理事長を辞めようとはしない。それに業を煮やして、今回の作戦に出たというのだ。
「しかし、それでは吉野学長は自分の義父に反旗を翻したということですか？」
父や母が大好きな横山には、にわかに信じられないことだった。
「吉野学長自体は、それほど悪いひとではないんですが、そのとりまきがどうも怪しげなんです」
横山は山田が情報通であることに驚いていた。まったく大学の政治的な部分には興味がない自分とは大違いである。
「理事の中には、理事長を支持しているグループと、吉野学長を支持しているグループがあります。学長を支持しているというよりは、利用していると言った方が正しいのですが」
「しかし、理事たちにどんな利益があるのですか」
「実は、一部の理事たちは、この大学の土地を売って、郊外に移転したいと考えているようなんです」
「キャンパス移転ですか」
「ええ、実は、この大学の敷地を購入した時よりも、土地の値段は数倍に跳ね上がっています」
「しかし、土地を売ったからと言って、理事たちの懐に金が入るわけではないでしょう」
「横山先生は、本当に素直な方ですね」
　横山は、山田にばかにされたような気がして、少しむっとなった。
　最近、山田にいろいろ教えを請うてはいるが、自分のほうが兄貴分という気でいる。

「巨額のお金が動く時には、必ず余禄がつくというものです。例えば、この土地をいくらで売るか。これが問題です。例えば、百億円の売値を九十九億円にします。そして、残り一億円は、業者からリベートとして自分の懐に入れる。簡単に、大金が手に入るのです。土地取引では三％程度のリベートはつきものといいますから、実際には三億円ですかね」
横山は素直に関心した。確かに、金額が大きければ、色々とごまかせそうだ。
「ごく最近、都内にある工科系大学の移転にともなって、建築学科の教員が、設計料だデザイン料だと言って十億円もの金を自分の懐に入れたということを聞きました」
「それはすごいですね。で、その教員らは逮捕されたんですか」
「それが、倫理上は問題があるが、法律上は問題がないということで、おとがめなしだったそうです」
横山は一瞬、自分も建築学科を目指せばよかったと思ったが、すぐに、そう考えた自分を恥じた。
「実は、今回の事件には、一部の理事が話を勝手に進めて、移転先まで決めてしまっているということが背景にあるようなのです」
　山田の話によると、学長派の理事たちが、勝手に土地の売却先を決めてリベートを貰っているようなのだ。黎明学園大学があるこの場所は都内の一等地だから、開発業者にとっても魅力的なのだという。さらには、大学の移転先予定地も、すでに自分たちで土地を買い占めており、それを大学に高く売りつけようという魂胆らしい。横山はあきれてしまった。
「でも、理事長が首をたてに振らなければ実現しませんよ」
「だからですよ。今度の事件がきっかけで、理事長が辞めてくれれば、後は、学長派のやりたい放題です」
「しかし、理事長が何をやったというのですか」
「今回、問題になっているのは私立学校施設整備補助金というものです」
　山田はつぎのように説明した。
　黎明学園大学では、大学の施設の一部の耐震補強工事を行った。この際、同じ業者に田村記念館の工事も請け負ってもらった。しかし、記念館は大学の所有ではなく、田村個人の所有である。
　この補助金は、大学が支払った額の半分を国が補助するという制度であるが、田村記念館という私物の工事にも、補助金が流用されたというものである。
　しかし、田村には、もともと補助金を申請する意志はなく、会計担当者が勝手に行ったことである。記念館の工事費はわずか一千万円ほどである。理事長が、こんな金で不正を働くとは考えにくい。
　山田はどこからこんな情報を得てくるのだろう。横山は大いに関心した。

その日の夕刊には
「黎明学園大学理事長が補助金を不正に流用か？」
というタイトルの記事が各紙を飾った。文化省はこれに対し
「もし、不正流用が本当ならば、補助金は返還していただく」
というコメントを出している。
　つぎの日、田村は黎明学園大学の理事長を辞めるという決心を固めたことが報道された。
「自分にやましいことはないが、世間をお騒がせした責任をとらしていただく」
というのが田村の言葉だった。
　横山は、やりきれない気分だった。もし、山田の言うことが本当だとしたら、悪いのは、業者からリベートをとっていた学長派の理事たちで、理事長は陥れられたことになる。こんなことがまかり通っていいのだろうか。いままで政治にはまったく関心がなかった横山であるが、はじめて義憤というものを感じた。
　横山は理事長室を訪れた。田村は留守であったが、事務長の吉川が部屋の片付けをしていた。横山が部屋に入ると、吉川は驚いた。
「横山先生どうされたんですか。理事長はもう大学には来ませんよ」
「そうですか。逢って、お話をしたかったのですが」
「先生、いま理事長に面会されると、よからぬ噂が立ちますよ」
横山には、どんな噂を立てられようと関係のないことであった。
「ところで、吉川さんはどうされるんですか」
「ええ、もとの田村交通に戻ります。こちらは出向の身分でしたから。また、社長の運転手に戻りますよ」
「えっ、吉川さんは田村理事長の運転手だったんですか？」
「実はそうなんです。私は、ある建設会社の課長をしていたんですが、談合がばれまして、その責任をとらされたんです。
　もともと、私自身は談合には反対だったんですが、会社の方針ですから逆らえませんでした。
　ところが、それがばれると、談合を承知していた役員や社長も知らぬ存ぜぬです。私が全責任をとるかたちで辞めさせられました。幸い、告訴までは至りませんでしたので犯罪者にはなりませんでした。
　驚いたのは、全責任をとれば後の面倒をみると言ってくれていた会社が、面倒どころか、けんもほろろな対応です。結局、退職金ももらえずに会社から放り出されました」
「それはひどい話ですね。」
「私が馬鹿だったんです。もっと会社の不正と正面から戦っていれば、あんな目に逢わずに済んだのかもしれません」

横山には想像もつかない世界だった。
「そんな時に私を救ってくれたのが、田村不動産の田村社長です。運転手でよかったら、俺が骨を拾ってやると言って下さいました。
　実は、談合で会社を辞めたことが分かると、どの会社も雇ってくれないのです。家族のこともあり、どうしようかほとほと困っていた時でしたから、本当に助かりました」
「最初は、本当に運転手でしたが、ほとぼりがさめると、社長は、私を田村交通の課長に引き立ててくれたのです。そして、大学の事務長にまでしてくれました。本当に感謝しております。それだけに今回の騒動は残念でなりません。理事長の名誉を挽回したいと私は考えています」
吉川はきっぱり宣言した。
「私ができることなら何でもお手伝いします」
と横山が言うと
「いえ、横山先生は今までどおり、学生に人気のある先生でい続けて下さい。政治的な話にはクビをつっこまない方がいいですよ」
と釘をさされた。
それは、横山が頼りないということであろうか。

天網恢恢

　田村が辞任すると、学長派の理事がその後を継いだ。まもなく、キャンパス移転の構想が発表され、移転先と、移転後の大学のデザインまで公表された。
　ここまで計画が煮詰まっているということは、かなり前から計画していたことになる。山田は憤慨していた。こんな暴挙は許すわけにはいかないと。
　しかし、横山にはどうでもいいことのように思えた。こんなことは、どの世界にもある。国がやっている公共工事がいい例だ。強い政治家がいる地域には分不相応な豪華な建物や道路がどんどん建設される。いくら国が巨額の赤字を抱えていてもお構いなしである。
　官僚が天下った企業には、ごほうびで発注がいく。これも、適正価格よりもはるかに高い金で受注されていく。理不尽と嘆いたところで、力があるものには敵わない。横山の心配は、キャンパスが移転してしまうと通勤が大変になるということぐらいである。
　移転先は、埼玉県の片田舎で、すでに土地の買収が進められているという。山田の話では、理事のひとりが関連する不動産会社が土地を買い占めていて、買取価格の数倍で大学に転売する予定らしい。
　学長派の理事たちには一億円の金がリベートとして渡されたという。一億円といえば大金であるが、金に執着のない横山には、そんな大金を何に使うのだろうかと不思議だった。大学の理事になるくらいだから、結構な金持ちだろう。それが、不正を働いて金儲けに奔走する。情けない話である。
　キャンパスを移転するという話は、学生の間でも大きな話題になった。黎明学園大学が、いまの人気を誇っているのは、キャンパスが都心にあるということが大きな理由のひとつである。それが、不便な田舎に移転したのでは、大学の魅力が失われてしまう。
　しかも、いまのキャンパスは、田村が採算を度外視して、建設したものである。そのため、建物がしゃれているうえ、ゆったりとしたつくりとなっている。特に、正門から続くイチョウ並木は有名であり、映画やテレビドラマでも撮影現場に使われている。
　かつて、大学を舞台にした若者群像を描いた人気テレビドラマが黎明学園大学で撮影されたことがある。連日のように、有名な男優と女優が撮影に訪れ、学生の間で大騒ぎになった。それだけに、キャンパスに愛着を持っている学生が多いのである。
　しばらくすると、大学のＯＢが中心になって、キャンパス移転に反対する署名運動がはじまった。もちろん、現役の学生も、ほとんどが反対である。そして、キャンパス移転を勝手に決めた理事会に対して質問状が出された。

「何のために移転が必要なのか」
　明らかして欲しいというのが、その趣旨である。大学自体は、大きな黒字は出していないが、堅実な経営を続けていた。あわてて移転する必要などないのである。
　もちろん理事たちの本音は
「移転をうまく利用して金儲けしてやろう」
というものである。
　しかし、回答書に、それをそのまま書くことはできない。回答は、杓子定規なもので
「今後の大学の発展のための長期的視野にたった決定」
というのが、その趣旨であった。しかし、この回答には、誰も納得しなかった。
　それからすぐに、ある週刊誌に
「黎明学園大学の闇」
と題する記事が掲載された。
　その記事には、キャンパス移転は、移転を利用して金儲けをたくらむ理事たちが無理やり計画したものであり、前理事長の辞職も、移転に反対していた理事長を排除するために仕掛けられた罠であったと書かれている。
　そして、すでに一部の理事によって移転先の土地が買い占められており、大学は相場よりも高い金を払って土地を購入することになっていると指摘している。そして、一部の理事には巨額のリベートがすでに支払われていることも明らかにしている。
　山田は興奮した面持ちで、この週刊誌をもって横山のもとを訪れた。
「横山先生、この記事を読みました。すごい内容ですよ。しかも不正を働いた理事たちの名前も実名で載っています。誰か内部の人間がリークしたとしか思えません」
興奮している山田を無視して横山は
「ああ、山田先生、いいところに来てくれました。この英文の意味が少し不明で困っていたところなんです」
と聞いた。
　最近の横山は、本当に勉強家になった。いままで遊びに遊んできたことへの反動のように、勉強に励んでいる。
　もともと英語の素養はあったので、めきめきと読解力が上達している。
　本来、大学の助教授が急に能力が向上するということはおかしい話なのだが、横山の場合には、スタート時点がおそろしく低かったので、急激に伸びたのである。
「横山先生、勉強もいいですが、少しは、学内のことにも気を回してください

よ」
山田は少しあきれながら、横山が取り組んでいる英語の本に目を向けた。驚いたことに、ハリウッド映画の台本ではなかった。
　本の表紙には
A brief history of time
とある。
「先生、この本はいったい何ですか？」
横山はうれしそうに
「山田先生でも知らないことがあるんですね。知りませんか、ホーキングという学者を。イギリスの有名な物理学者です。彼が、一般向けに書いた解説書なんですよ」
「ホーキングは知っていますが、彼の書いた本は読んだことがありません」
山田は目をみはった。一般向けとはいえ横山が科学に関する本を読んでいるのだ。
　横山は、少し恥ずかしげに
「実は、映画のタイムマシンの台本を学生と呼んでいたら、学生から質問が出ましてね。タイムマシンは本当に可能かどうかを聞いてきたんです。そう考えたら時間は不思議だなと思い出したんです。
　そこで、今度の授業のときに学生たちに少し時間の話をしてあげようと思って読み出したんです」
　山田は少し反省した。最近、自分はあまり勉強していない。
　実は、大学教授は勉強するのが当たり前と考えているひとが多いが、勉強している大学教授はごく一部でしかないのである。大部分は遊びほうけていると言った方が正しい。
　大学教授の職を自由業と考えているものさえいる。教授の職についただけで、自分が偉い学者になったと勘違いしてしまい、自分で努力するということを怠ってしまうのだ。助教授という職についた経緯に問題があるとはいえ、横山の猛勉強ぶりは見習うべきものがある。
「山田先生、ここに書いてある imaginary time というのがよく分からないんです。その後にも、ちょくちょく登場するんですが、この語句の意味が分からないために、苦労しているんです。直訳すれば想像上の時間ということになるんですが、それでは意味が通らないんですよ」
山田は少し考えて、こう答えた。
「私も物理が専門ではないので自信はないのですが、それは虚時間と訳すのが正しいと思いま。」
「きょ時間ですか。きょとはどういう字を当てるんですか」

横山は、一体全体どんなことなのかと興味津々である。
「先生は虚数というのを聞いたことがありますか」
横山は、高校時代に数学をほとんど習っていない。母は理系に進ませたかったようなのだが、数学と物理の授業を受けたとたんに、すぐにあきらめた。
「いえ、まったく分かりません」
これは自信を持って言える。
山田は、横山に理解してもらうのはたぶん難しいだろうなと思いながらも、虚数について説明した。
「虚数というのは想像上の数字です。だから英語では imaginary number と言うんです。同じ数字をかけたら必ず、正の数になりますね」
横山は頭の中で、少し考えて、なんとなく理解した。
「ところが、誰かが、同じ数字をかけてもマイナス１になるものを考え出したんです。それが虚数です」
横山は分かっているの、分からないのか微妙な表情で聞き入っている。
「imaginary の頭文字をとって虚数は i と表記します」
　横山は真剣そのものだ。
　山田はなんだか可笑しくなった。このひとはまるで子供みたいだ。
「虚数は、最初、役に立たない疫病神みたいに見られていた時期もあったのですが、二十世紀になって、量子力学という学問が生まれました。この学問は、エレクトロニクスなどの分野に応用されている重要な学問なのですが、量子力学の基本方程式が虚数を使わないと解けないことが分かって、いっきにその評価が高まったのです」
「量子力学ですか。また、変なものが出てきたな。」
おそらく、横山は量子力学のことも調べるに違いないと山田は思った。
「虚数が面白いのは、一次元の数の世界が、二次元の世界に広がるということです。虚時間というのは、われわれが普段経験している時間軸を実数とすると、もうひとつ別な次元の時間ということになります」
　横山は、いろいろなことを質問してきた。山田も数学や物理の専門ではないので、その全部に答えることはできなかった。それでも、横山は興味津々という顔で熱心に聴いていた。
　山田が一通り説明し終えると、横山はこう言った。
「ちょっと理解できないところがありましたが、虚時間がどういうものかはなんとなく分かった気がします。しかし、虚数を発明するなんて、面白いことを考えるひとがいますね。世の中面白いな」
山田はこういった。
「横山先生のように単純に感激してくれるひとばかりなら教える方は楽なんで

すが」
横山は、今度は虚数と量子力学についてもっと勉強しようなどと言っている。
「しかし、山田先生は博学ですね。本当に感心してしまいます。数学にも造詣が深いんですね。ところで、先生はどんな用事で来られたんでしたか」
山田も、すっかり週刊誌の記事のことを忘れていた。
「そうそう、すっかり忘れていました。週刊誌に大学の理事会が行った不正が告発されているんです」
そう言って、山田は横山に記事が載っている週刊誌を渡した。
「つぎの号にも、続きが出るらしいです」
横山は記事に目を通すと、こう言った。
「天網恢恢疎にしてもらさずとはまさにこのことですね」
山田は驚いた。いつのまにそんなことわざを覚えたのだろうか。
　大学の助教授に対してこんなことを言うのは失礼かもしれないが、横山の学力は確実に向上している。
　同週刊誌には、つぎの号でも黎明学園大学の理事たちの不祥事についての記事が載った。驚いたことに、理事のひとりが関連している不動産会社が移転予定地を買い占めた経緯と、それにかかった費用、さらに売却予定価格も載っている。なんと、この会社は、この転売だけで一〇億円近い利益をえると書かれている。
　しかし、この記事に対し、大学はいっさいコメントを出さなかった。完全無視を決め込んだのである。
　ただし、理事会内では大きな動きがあったようだ。不動産会社に関係している理事が、一身上の都合という理由で、突然理事を退任した。そして、キャンパス移転計画が撤回されることとなった。
　山田には、いったい大学執行部内でどのような工作が行われたかを知る由もないが、いずれ、結果は、大多数の人間が、望んだかたちになった。